

一 仏国公使の目で見た自由党

——サンクイッチ公使書信を中心にして——

彭 澤 周

【要約】 本稿は、一八八四年日本駐在フランス公使サンクイッチがパリ政府に送った書信を紹介し、それによって彼の目にうつった自由党のすがたを説き、さらにこの書信が日仏交渉史の上にはたした役割を考察したものである。史料 四八巻二号 一九六五年三月

書信の紹介

自由民権運動の研究は、近年、史学界における主要な課題の一つとなつてゐる。この問題に関する論文は、数えれば百篇以上に及ぶと思われるが、いずれも現在の研究者たちの目から自由民権運動を、あるいは自由党を分析して、それに若干の批判を加えたものでしかない。しかし、民権運動時代の人々、とりわけ日本に駐在していた外国人の目にうつった自由党のすがたを見ること

も、重要な価値をもつ研究課題であらう。私は、フランス側の「日本に関する政治通信文書」(Correspondance Politique de La Legation au Japon)の中から、自由党に深い関係をもつ一通の書信を発見した。この書信は、一八八四年(明治一七)十一月三日、駐日フランス公使サンクイッチ(Joseph Adam Stenkiewicz)の手に成るものである。まず、この書信の全内容を掲げよう。

内閣総理大臣殿

日本の諸政党には激しい気魄といったものがないように思われます。立憲保守党(Le Parti des Conservateurs Constitutionnels)は、昨年、姿を消しました。それを残念に思う人は、誰もありません。ごく最近、大阪で開かれた公式の会合で、板垣氏は進歩的な自由党(Le Parti Liberal Progressiste)を解散すると発表しました。彼はその自由党の熱心な組織者であり、三年間多少のごたごたはありましたが、その自由党を指導して来ました。そしていかなる抗議も聞き入れませんでした。今日ではそれゆえに、改進黨(Le Parti de La Réforme)と帝政保守党(Le Parti des Conservateurs Imperialistes)しか存在していません。

かつて、これら各種の政党の指導者たちは、率先して紙上で非常に活潑な運動を行いました。その結果、一八八一年一月に詔勅がくだり、それによって天皇は、一八九〇年に憲法を制定し、国会を開設することを約束しました。しかし、彼らは、それ以上のことを期待しておりましたので、天皇の詔勅は、いささかも彼らを満足させませんでした。彼らは、自分たちに約束されている自由な政体をいっそう早く到来させる目的をもって新たに運動を企てようとした。しかし、天皇政府が未来の憲法に関する公開の論争を蔽罰をもって禁

止する法令を公布しましたので、その運動の指導者たちは、すでに沈黙を守らされている新聞を自由にすることができず、せんでした。したがって、彼らは、政治的綱領を刊行して、彼らの周囲に黨員を寄せ集めることをしました。

自由党すなわち自由で進歩主義的な政党が、まず最初に、旧大臣で天皇の内密の助言者たる板垣氏の下に創立されました。この結社の黨員たちは、血判誓約によってお互に助け合うことを承諾し、自由で進歩主義的な政治を擁護することを約束しました。この政党の漠然として不明確な綱領は、なんらかの理由で現在の方にひどく不満を抱いているすべての人たちを煽動して引きつけるように作成されているだけに、黨員の数はなおさらに多くなりました。

同時に、大蔵大臣たる大隈氏は、彼と彼の同僚たちとの意見が全く一致しないので、辞職しました。多数の官吏は彼の例に従いました。それによって、別の自由派政党が生まれました。その自由派政党は、板垣氏の自由党よりも、その主張においていっそう穩健で、改進黨すなわち改革の党(Le Parti de La Réforme)という名称を用いました。大隈氏はその党の指導者となり、総裁となりました。

保守黨員たちについて申しますと、彼らは二つのグループ

にわかれしました。すなわち、先ほど私がそのことについてお知らせしましたように、もはやすでに存在していない立憲保守党員たちと、現政府がまさかの時に頼り得る帝政保守党員たちとです。

このように組織された四つの政党の総裁たちは、党員を集めるために、非常に盛んな活動を展開しました。まさしく未だの国会を目ざして、非常に早くから勢力を作ろうとするところが、課題であったのです。しかしながら、この国会が開設されるまで長年待たねばなりませんでした。日本人はあまり忍耐強くはありません。まもなく、宿命的に起らざるをえぬことが、間違いなく生じました。すなわち政党間の敵対競争が非常にはげしくなって、そのために、人々はほとんど一般的な利害の問題を忘れてしまったありさまです。最近のかなり速く相次いで起りましたゆゆしい騒乱は、いわば進歩主義的な自由党を非難するいいこうじつに役立ちました。と申しますのは、この自由党は、実際にヨーロッパやアメリカの社会主義者たちの主張から借用した間違った思想のしみこんだかなり多くのさわぎ好きな若者たちを、彼らの仲間に擁していたからです。板垣氏は自己の地位を危くすることを恐れました。そこでこの一〇月二九日に彼は、一八八一年一〇月二

九日発足した進歩主義的な自由党を解散しました。しかし、彼は、誇張した冗長な講演で、気をつけて次のように述べています。「たとえ情勢が自由なる進歩主義者たちに党としてもはや活動することを許さないとしても、各人は祖国の将来とその繁栄が一にそれにかかっているところの思想に身を献げるために、一人一人がその全精力を注がなければならぬ。」

しかし、すでに人は進歩主義的な党 (Le Parti Progressif) の解散を異なった意味に解釈しています。すなわち板垣氏の退却は、単に天皇政府によって買収されたことによるものだといわれています。しかし、こういった種類の非難は常に危険です。と申しますのは、それらの非難を証拠にもとづいて支持することが困難であるとしても、その非難の対象となつてゐる人たちにとつて、その誤りを論証することはいつそう困難なことだからです。しかし、板垣氏が一八八二年の終り頃、後藤氏と一緒にヨーロッパに行つた時に、天皇政府が彼に旅行の便宜を与えたことは確認されています。また、彼が帰国した時には、その主張が発前よりもはるかに穩健になつてゐるような態度を示したことは確かです。

私は板垣氏の演説を聞く機会に恵まれました。彼は私に政

政治家というよりもむしろ政治結社の雄弁家といった印象を与えました。彼の友人である後藤氏は、逆に若干の政治的な才能を持っているように思われます。彼は、ものごとに対して、程度の高い実感的な感覚を持っています。しかし、彼にはあまり商業的投機に頭をつっこみすぎるといふ、政治家としては大きな欠点があります。それにもかかわらず、依然として天皇政府がたえずこれら兩人に対してひどく用心をし加減をしているのは確かです。おそらく現政府の大臣たちや彼らの旧同僚たちの間には、將軍政府（Le Gouvernement du Shogoun）廃止の頃にまでさかのぼる共通の秘密が存在するのでしよう。

それがいかなるものであろうと、日本の諸政党の勢力は、いわば潜在的な状態にあります。国会が開設された時にしか、そのことを正確に把握することはできないでしょう。それまで、日本にはおそらく現在のままの政体が存続するでしょう。この現在の政体は寡頭政治に変形された將軍政治にはかなりません。

右、敬具

一八八四年一月三〇日 東京

駐日公使館

サンクイッチ

追伸

去る三月二五日に私が日本の新聞について報告しました中に、思わぬ誤りが一つありました。それを修正しなければならぬと思います。改進黨（Le Parti de La Reforme）の総裁すなわち穩健な党の総裁は大隈氏であり、自由党（Le Parti Liberal modéré）の総裁が板垣氏であります。進歩主義的すなわち急進的な党の解散は、或る時点において、大隈氏が果し得る役割の重要性を引きだしたせるのに寄与するでありましょうから、大隈氏は自分の態度をはっきりさせることに或る利益をもっています。

サンクイッチ

自由党との関係

われわれは上掲の書信によって、サンクイッチ公使の自由党に対する批判を知ることができる。一言でいえば、サンクイッチ公使は自由党に対して何らの好感や同情も持っていない。しかし、彼はこの書信を書くに至った理由は、自由党と関係をもつ彼が、自由党の反政府運動によって発生した日本の社会不安にまぎこまれて、自由党に対して反感をもち、批判を加えるに至ったからであらう。

一八八三年一〇月五日にアメリカの汽船で横浜に到着したサンクイッチ公使は、同月一日に国書を捧呈するために、東京赤坂仮皇居へ参内した。翌日の『自由新聞』は、彼の参内について次のように報道している。

昨日午後一時雨中を冒して宮内省より御差廻になりし御馬車に乗じ
訳官と共に赤坂なる仮皇居へ参内せられ聖上には便殿へ出御在らせ
給い大臣参議等列坐の上謁見を仰付られしが同公使にはもたらし来
られし国書を捧げ奉られおわって茶菓等を賜り退朝せられしといふ

当時において、自由新聞には他の新聞よりもサンクイッチ公使に関する報道が詳しかった。これは、先進民主主義国たるフランスを模倣し、共和主義による国家体制を樹立しようとした自由党系の人たちが、フランス公使に対して最も好感を持っていたことによるに違いない。

サンクイッチ公使の来日後の一年間、すなわち一八八三—一八八四年は、あたかも日本の諸政党の盛衰が政界に大きな波紋を投じた時期である。自由民権運動の気運は最高潮に達し、政府、政党、農民および地主などの間にそれぞれ矛盾が生じた。これらの矛盾がサンクイッチ公使にかなり強い印象を与えたと見られる。

一八八四年に至って自由民権運動が激化した。自由党の指導者たちは、国内革命の目標を朝鮮に転換しようとした。日本の民主

主義革命運動は、ここに至ってはじめてその本質に変化を生じた。いいかえれば、民権主義から国権主義へと移行し、侵略的意図が露呈して来たのである。この問題について、自由党は、同年四月一日から二〇日まで前後五回にわたり、「朝鮮に対する政略を論ず」と題する論文を『自由新聞』に掲載した。その要旨は、清国の朝鮮における封建支配勢力を一掃し、朝鮮を独立させなければならぬことを強調したものである。これは表面から見ると、国際の連帯性を持つ反封建闘争であるが、実はそうではない。というのは、従来、彼らは朝鮮を日本と対等にあつかうことを考えなかつたからである。彼らの目的は、清国に代って朝鮮を支配することにほかならない。この計画を実現するために、自由党の板垣退助、後藤象二郎らはサンクイッチ公使と会談し、フランス当局に対して百万円の借款を申し入れた。^①そのため、自由党とサンクイッチ公使との関係がはじまったのである。

一八八四年九月九日、板垣・後藤らとサンクイッチ公使との会談に際して、板垣はフランス当局の援助を得るために、次のように述べている。

予夙に自由主義を奉じ、人權同等を唱ふ。今や朝鮮久しく清国の圧する所となり、独立党在りと雖も、力微にして自から起つ能はず。然るに朝鮮国王特使を派し、我が親友後藤に対し朝鮮國の扶植を依

頼し、委するに改革の全権を以てし、且つ後藤を宰相に挙げんとす。予等一片の俠心、深く朝鮮の事情を憐れみ、之を援けて清国の干渉を絶ち、我と同じく亜細亞の半島に新立憲國を建造せんと欲するも、只だ耽耽づらんは方今疲弊せる在野有志の計画に係り、且つ極めて秘密運動に属するの故を以て、其資を募るの便を缺く、而して予密かに貴國の爲めに謀るに、今や独逸は既に朝鮮に顧問を派し、其勢力を扶植せるも、貴國は他國に比して一籌を輸するものあり。幸にして貴國の力により貸すに百万円の資金を以てせらるれば、貴國は常に東洋に於て自由の友たるの名譽を博することを得るのみならず、其交際を開くや遅くして、而かも其勢力を植ゆること却て他國に勝るものあらん^②。

自由党総理たる板垣が、このように傾聴すべき高論を吐いたことは、サンクイッチ公使にいったいかなる印象を与えたか、それは想像にあまりあろう。

元来、外国に駐在する一國の公使は、國家の代表として自國政府と駐在國の政府との間に外交上の諸事務をとりあつかうことが、本来の責任である。公使の権限を越えて、駐在國における政府に對立する政党と結托することは、絶対に許されない。一八八四年に至つて、自由党の反政府行動は激しくなつた。当時の東京駐在の各國公使らは、日本国内の情勢に対してすべて中立の立場をとつていたが、サンクイッチ公使のみは、列國公使と異なつて、自

由党と深いつながりをもつていた。板垣・後藤らとの会談後、彼らの方では、自由党の動きを注意しながら、他方では、板垣・後藤らのところから朝鮮問題をめぐる情報を獲得しようとした。この書信によると、サンクイッチ公使は、漠然とみずからの立場から、当時の日本国内における政治情勢、諸政党の状態および板垣・後藤らの行動を分析した。それはいうまでもなく、きわめて主観的なものであつた。駐日外交官としての経験がわずか一年にすぎない当時の彼が、日本における自由民権運動の眞の性格や社会との連体關係を、いったいどの程度まで正しく理解しえたかは、疑問である。

しかし、他の角度から見ると、この書信は、パリ政府に日本の実情をいっそう理解させる役割をはたすものだから、当時のフランスの対日外交策にきわめて重要な意義をもつたであらうことを認めなければならない。

① 拙稿「フェリー内閣と日本」『史林』一九六二年第三号四八―五〇頁および拙稿「朝鮮問題をめぐる自由党とフランス」『歴史学研究』第二六五号に見える。

② この引用文『自由党史』（下）二二六―二七頁による（）は、サンクイッチ公使の書信（Entretien de M. Le Ministre de France avec M. M. Itagaki et Goto, Le 9 Septembre 1884）中に収められていないが、会談の主要な論点は一致する。また、フランス当局に百万円の援助を要請した計画は、板垣か後藤かという問題については、『自

由党史」と『伯爵後藤象二郎』との間に内容上多少のくいちがいがあ
る。『自由党史』下二六頁によると、「一日後藤詳かに胸臆を自由党
総理板垣退助を語り、資金に困む所以を訴ふ。板垣曰く、我れ請ふ之
を仏國公使に説かん」という。これによれば、サンクイッチ公使に借
款を申し入れたのは板垣の主張である。しかし、板垣の慎重な性格か
ら見ると、そんなことはありえない。これは必ず後藤の計画である
と思われる。『伯爵後藤象二郎』によると、「伯は金（金玉均を指す）
筆者」と約してより、将に一年とならむとす。一方には金が韓王の詔
勅を得来るを待ち、一方には百万円を得むとて苦心せしが、忽ち仏公
使に説かむことを思い起せり」という。後藤は小林樟雄を通じてサン
クイッチ公使との面会を求めて、借款問題を交渉した。その際、公使
は後藤に「自由党総理板垣退助君は、本件に關係ありや否や」とたず
ね、後藤は、直ちに「然り、板垣は之が発頭人なり」と答えた。しか
し、「実は伯未だ之を板垣に告げざりしかど、公使の語氣にて、板垣
を信ずることの厚さを看破し、今其関与せざることを打明けなば、折
角の大望も、忽ち水泡に帰せむとて、咄嗟の間、氣を利かして、斯く
答へけるや」といつている（同書五四六頁）。したがって、後藤はこ
の借款の計画を板垣に告げて、板垣の同意を得たあと、兩人とともに
仏公使館を訪問したとみられる。『伯爵後藤象二郎』の記事はきわめて
正しいと思われる。

外交の手腕

サンクイッチ公使は、一八八三年一〇月から一八九四年六月ま
で日本駐在公使としての生活を送った。フランス歴代駐日公使の
中で、一〇年以上在職した公使は、彼のほかにはない。一八八三

年フランスのジュール・フェリー (Jules Ferry) の第二次内閣
(一八八三—八五) 成立後、トリクロー (Trochu) の後任として日本駐
在公使に任命された。一八八三年の春、フェリー内閣が倒れたに
もかわらず、彼は依然として公使の地位を守り、新内閣の信頼
を得て、日本に引き続き駐在した。彼はひろく外交官のつねとし
て、たくみに言辭を弄しつつ、日仏兩國間の問題を処理した。日本
駐在中の彼について、自由党との關係を持つことを除いて、最も
注目されることは、金玉均の庇護および条約改正の交渉であった。
甲申事變の直後、すなわち一八八四年一二月末、金玉均は井上
角五郎らの援助によって日本に亡命し、福沢諭吉の保護のもとに
東京で亡命生活を送っていたが、その後、彼は後藤象二郎と結合
して、再び朝鮮の事大党を打倒することをはかった^①。それはひろ
く朝鮮政府には甚だ大きな不安を覚えさせた。そこで明治政府に
対し、金玉均を逮捕して朝鮮に引渡すことを再三要求した。また
同時に、李鴻章も日本に抗議した。そこで国際間の紛糾を避けよ
うとする明治政府は、やむをえず、一八八五年六月ごろ閣議を開
き、その決定によって金玉均に国外退去を命令した。その時、金
玉均はサンクイッチ公使と日本民間団体との援助を得て、東京か
ら横浜居留地二〇番館グラランド・ホテルに移転した。該居留地は
日本の法権のおよばないところであり、したがって金玉均の退去

問題の解決は、たちまち困難に逢着した。神奈川県令沖守固は、グランド・ホテルの所有者がフランス人であるから、横浜駐在仏国領事に話をした。領事は駐日フランス公使の指揮を仰いだ。結局、この問題を解決することはできなかった。七月二一日に至り、サンクイッチ公使が、金玉均をフランス郵船に搭乗させて、他国へ護送する旨を明治政府に伝えて来た。これに反対した井上外務卿は、サンクイッチ公使と交渉をかさねた上、最後に同公使の承諾を得て、金玉均をグランド・ホテルから引きとった。そして八月九日、明治政府は難民救助規則によって、金玉均を小笠原島に移したのである。^②

また、一八八八年二月二九日、大隈外務大臣は、条約改正の問題でサンクイッチ公使と会談した。大隈外務大臣は、維新以来、日本の法制や教育方面における大改革が行なわれたので、維新後の日本が幕府時代と全く異なるものであることを示した。そしてフランス当局が、日本政府の現状を諒解し、ただちに新条約案を受けいれるようにサンクイッチ公使に頼んだ。しかし、同公使はこの問題を自分自身の権限で解決することができず、日本政府の意向をベリに伝えると答えた。ところが、数ヶ月間たっても、フランス当局からは何らの返事もなかった。新条約案に対してフランス当局はいったいどう考えているかを調べるために、大隈外務

大臣はベリ駐在の田中公使に訓令して、フランス外務大臣の意向を問わせた。田中公使より大隈外務大臣あての一八八九年三月一日付電報によると、次のように述べている。

French Minister for Foreign Affairs told me he accepted principles of separated treaty of the new proposals and he has sent telegraphic instructions to French Minister in Japan to negotiation with you, but French Minister in Japan shall receive further instructions about the details of proposals.

この電報にもとづいて、大隈外務大臣はサンクイッチ公使と交渉した。しかし同公使は、また本国政府より新条約案に関する正式訓令を受けぬことを理由として、条約改正の談判を拒否した。この問題に関する事実は、同年七月二四日大隈外務大臣より田中公使にあてた「条約改正に関する仏国公使との交渉経過報告」の中にはっきり見える。サンクイッチ公使に大きな不満を持つ大隈外務大臣は、サンクイッチの論弁を好む性質があり、徹頭徹尾、曖昧であると批判を加えている。

以上の二つの事実によって、サンクイッチ公使がどういう人間であるか、また、いかなる外交手腕を持っていたかが知られるであろう。

さて、サンクイッチ公使は、一外交官としての立場から、自由民権運動、とりわけ自由党のそれに、なぜこのような批判を加えたのか、それを知るために、さらに彼の政治的背景を追究してみよう。

フェリーの第二次内閣は、パリの金融資本家たちの支持を得て成立した。フェリーの政策は、一方では金融資本を發展させ、大ブルジョアの支配権を確立し、他方では積極的に金融資本を輸出し、海外において植民地の拡大をはかった。その結果、フランスにおける絶対多数の人民は、たいへんな苦痛をなめることになった。当時、ジェルジュ・クレマンソー (Clemenceau Georges) が指導した共和主義左派と、プロレタリア革命家ジュール・ゲード (Guesde Jules) が指導した労働党は、フェリー政策に対してはげしい攻撃を加えた。ゲートの労働党は、一面ではマルクスの科学的革命理論を吸収し、他面、一八七一年のパリ・コミューンの革命闘争の経験をも取り入れており、当時のフランスでは最も進歩的な政党であった。労働党と共和主義左派との間には、革命闘争における基本原則に矛盾が存在していたにもかかわらず、反フェリー内閣という点では歩調を一にすることができた。だからフェリーの代弁者たるサンクイッチ公使は、社会主義のみならず、急進共和主義さえ恐るべきものと考えていた。このような立

場に立つ彼であるから、日本の自由民権運動、とりわけ自由党に対して、ひどい批判を加えたのであろう。

① 『李文忠公全集訳署函稿』第一八卷二〇頁「発覚朝鮮金玉均密謀」
光緒二十一年二月初二日。

② 『日本外交文書』第一九卷五七三—五八六頁。

③ 『日本外交文書』第三卷一四〇頁。

④ 『日本外交文書』第三卷二二四—二二五頁。また山本茂著『条約改正史』三六一頁には次のように述べている、「仏国公使シェンキウイツは大隈外相と感情的に良からず、故意に談判を遅延せしむる嫌があり、加ふるに我が駐仏公使田中不二麿は、免角退場的で当然の主張をも遠慮して十分云い出さぬ為め対仏交渉は停滞勝ちであったが、大隈は後者に対しては嚴重に督励を加え、前者に対しては所信をドン・ドン主張したので後には談判も進捗して、九月中旬には仏国政府は仏国公使に調印の全権委任状を送付するに至った。」

書信の影響

この問題に入る前に、まず当時の公使職権の影響力について簡単に述べておこう。一九世紀の中期、欧米諸先進資本主義国は、すでにアジアにおける植民地経営を始めていたにもかかわらず、アジア諸国に対しては深い理解をもっていなかった。というのは、一つには交通不便の条件に限られて、東洋と西洋との間に相当な阻隔が存在し、また、東洋の歴史文化や社会構造が西洋と根本的に相違していたからである。当時の欧米諸国の東洋に対する理解

は、ほとんど宣教師、商人、旅行者および探険家に紹介されたものによるといってよい。一九世紀の中期に至って、欧米諸国は産業資本の発展に従って海外市場を奪取しようとするために、安政三年（一八五六）、アメリカがはじめてハリス（Harris）を日本駐在公使に任命し、やがて安政六年（一八五九）にイギリスがアローク（R. Alcock）を、フランスがド・ベレクール（D. de Bellecourt）を日本駐在総領事に任命した。これは、欧米先進資本主義国が日本と正式に外交関係を樹立した嚆矢である。サンクイッチ公使の時代に入り、日仏の外交関係はすでに約三〇年間の歴史があったが、フランス当局の日本に対する理解は、依然として不十分であった。当時、日本駐在中のフランス公使の任務は、両政府間の外交事務を処理しながら、日本国内における政治情勢および社会状態を自国に紹介しなければならなかったであろう。いうまでもなく、公使の通信文書は自国政府の外交政策における根本的参考資料であるから、その意見は自国の対外策に決定的な影響を与えたはずである。いま、上掲のサンクイッチ公使の書信内容を要約すると、次の数点に帰せられる。一、自由民権運動は社会主義革命であると考えている、二、自由党に対しては好感を示していない、三、板垣退助を政治家と認めていない、四、後藤は政治的才能があるが、商業的投機思想の色彩をおびている、五、

当時の日本は依然として幕府時代の社会に停滞している。

この書信は一月三〇日に書かれたものである。当時の日本国内における政治情勢の動きについては、自由党はすでに解党していたが、大井憲太郎の関東「決死派」が、農民を中心として引きつづき激しい反封建闘争を展開していた。秩父自由党および国民党の一万数千人が、租税軽減や専制政府打倒をスローガンとして、一月初めごろ、関東一帯に蜂起した。明治政府は大量の警察、軍隊を派遣し、武力でこの革命運動を鎮圧し、反乱の指導者を逮捕して処刑した。これらの現象は、当時の日本における政治や社会がきわめて不安な状態に陥っていたことを反映するものである。さらに極東を中心とする国際情勢については、清仏戦争はにわかには危険段階に入り、また朝鮮における独立党の指導者金玉均らは日本の示唆のもとにクーデターを起して、事大党および清国の封建支配勢力を一掃しようとした。こうした情勢のもとでサンクイッチ公使が草したこの書信は、パリ政府にいかなる影響をあたえ、対日外交政策のうえにいかなる結果をもたらしたであろうか、次の三点が考えられる。

その第一の影響としては、フェリー内閣が板垣・後藤らに百万円の借款を拒否したことである。この自由党がフランス公使に借款を申し入れたことは、サンクイッチ公使の九月一五日付の書信

に見える。それによれば、九月九日のサンクイッチ公使との会談において、後藤は「朝鮮が必要とするものは次のとおりです。まず、軍隊を組織するために、百万円、すなわち五百万フランの金額を借りねばならないことです。一切はこの第一の問題に帰着するのです」といつている^①。しかし、その後サンクイッチ公使は板垣・後藤らが明治政府と完全に対立の立場にあることを発見したので、自由党の借款要望には、きわめて慎重な態度を持して来た。そして、彼は九月二十七日付のフェリー首相にあてた書信の中で、左のごとく建言した。

原則的にいって、その計画は全体として実現不可能なものとは思われませんが、と申しますのは、実質上独立国である朝鮮はフランス政府に対して借款を負い、そしてこのようにして手に入れた資金を朝鮮が思うままに使用するわけだからです。これほど正当で合法的なことはありません。それにもかかわらず、そのようになった場合、利家關係のある欧米諸国から苦情が持ち上るかも知れません。これらの諸国はわがフランスのおかげで朝鮮が演ずることになるかも知れない新たな役割を恐らく好感をもっては見ないでしょう。他方、われわれはこのようにして成功した場合、北京政府を極度に刺激するような提携に手をかすことはできないでしょう。清国にとって、朝鮮は安南とは全く異った重要性を持っているので、このような場合、われわれは清国との本当の戦争、すなわち北京を目標とする戦

いにひきずりこまれるでしょう。しかし、共和国政府の意向は全然このようなものではないと思います^②。

後藤の方は、その後一〇月中旬に至るまで、たえずフランス公使館当局と連絡を保ち、サンクイッチ公使と密接な關係をもって来た。しかしそのごろ、自由党内部の矛盾は一日一日と増加され、解党の危機に瀕していたので、板垣・後藤らはやがて相次いで東京をはなれた。かくて一月三〇日ごろ、すなわちサンクイッチ公使がこの書信をパリに送る直前二、三日まで、後藤・サンクイッチ公使の相互關係は全く中断状態にあった^③。しかも、自由党はすでに一〇月二十九日大阪で解党した。そこで自由党の借款申し入れの要望も、事実上不可能となった。もっぱら自由党の動向および日本の現状を報告することに重点をおいたこの書信は、日本に對するフェリー首相の理解をいっそう深めさせ、それが板垣・後藤らの借款申し入れをあきらめさせたことは疑いないであろう。

第二の影響としては、日仏同盟の不成立をもたらしただけである。サンクイッチ公使は、日本の社会不安を指摘しながら、板垣・後藤らにきびしい批判を加えて、彼らも明治政府内の旧官僚と何か密約があるのではないかと疑っている。元来、長期にわたる清仏戦争は泥沼状態に陥っていたために、フランス当局は、必要な場合、日本がフランスと共同行動をとって清国に對抗する

ように望んでいた。明治政府も、清仏戦争の危機に乗じて、日清両国間に横たわる朝鮮、琉球両問題の解決をはかろうと考えていた。したがって、日仏両国の関係は極東国際情勢の緊張によっていよいよ密接になる趨勢にあり、日仏同盟の風説が国際間に伝えられた。^④一八八四年の秋には、フランスの対清作戦がきわめて不利な状態へ移行した。当時、清国駐在フランス公使パテノートル（Patente）が、台湾基隆から受け取ったクルベ提督の一〇月七日付の書信には、次のように述べている。

わが国の軍隊の衛生状態は今までもよりも悪いです。今日、もはや千百人の兵士に武装させることはできません。占領している陣地と宿营地を保持するために一千人の兵士を差引いてご覧なさい。偵察隊として残っている者のご賢察願いたい。攻勢だなどと言えないのは確かです……予告されている援軍の到着するのが待遠しいです。当地において千五百人から二千人の壮健な兵士が得られないかぎり、われわれはあらゆる敵の奇襲にさらされることになるでしょう。幸い一月二日と同月一四日、清国兵はひどい懲らしめを受けました。彼らが再び奪回にすることができないのは、恐らくその記憶によるものでしょう。^⑤

このような情勢を知ったパテノートル公使は、パリ政府の措置には甚だ不満を抱いた。しかもこれは、パテノートル公使に限らない。フランスの極東派遣軍の將校、たとえばクルベ提督らも

同様である。しかし、フェリー内閣は、軍事費の支出が困難なために、強大な陸海軍を派遣して一挙に清国を屈服させることは、とうてい不可能であった。もしこのうえに対清作戦を続けるならば、フェリー内閣の危機はいっそう深まることとなる。当時、フランスの極東駐在公使や將校らは、対清政策の意見において必ずしも一致しなかった。パテノートル公使とクルベ提督らは、日本の力をたより、直接あるいは間接に清国を牽制しようとする意見であり、これに対して、日本国内の実情を知っているサンクイチ公使は、日本の力を借ることを全く考えなかった。いうまでもなく、日仏同盟は具体化したものではない。しかし、フェリー首相の対清政策は主にパテノートル公使の意見に左右されていた。ただろうし、首相自身、日本を利用して清国を牽制する意図を確かにもっていた。たまたまそうした際にサンクイチ公使が、日本の政治不安や自由党の解党などをパリに伝えたのだから、フェリー首相はパテノートル公使らの意見を採用することに、慎重にならざるをえなかったと見られる。

第三の影響としては、条約改正を遅延させたことである。サンクイチ公使は、この書信の中で「それまで日本にはおそらく現在のままの政体が存続するでしょう。この現在の政体は寡頭政治に変形された將軍政治にはかなりませせん」と示している。すなわ

ち、明治維新は少なからぬ改革を行ったにもかかわらず、すべての改革はただ形式上の改革にすぎず、幕府以来の封建社会の本質は依然として残存しているというのである。このような見解は、パリ政府に日本の後進性や封建性を示し、日本の条約改正要求については、慎重に考慮するよう要請したのではあるまいか。周知のように条約改正交渉は、維新後の外交における最も重要な問題であった。八年間の苦心努力を尽した井上外務卿は、結局、この交渉に失敗した。井上の後継者として大隈外務大臣は、厳密主義、国別談判、最惠国条約の有条件的解釈および対外強硬主義などの方法で、欧米諸国と相次いで談判を進めた。その後、相当な困難を経て、一八九四年に至り、英米兩國がはじめて日本と改正条約を調印し、他の諸国もそれにつづいて調印した。しかしフランスのみは、条約改正談判が容易に進行せず、曾禰荒助公使がパリ政府と新条約を締結するまでには、約二ヶ年の歳月を費した。^⑥当時のフランスが最も重要視した問題は、土地所有権と関税の二件であったが、他の角度から見ると、日本になお後進性や封建性を認めるフランスには、日本を対等視しえない主観的意識が依然として残っていただろう。

① 拙稿「朝鮮問題をめぐる自由党とフランス」(『歴史学研究』第二六五号)。

② 拙稿「フェリー内閣と日本」(『史料』一九六二年第三号)。
③ 上掲拙稿所収サンクイッチ公使の一二月四日付フェリー首相にあてた書信。

④ 日仏同盟の問題については、拙稿「フェリー内閣と日本」の中ですでに検討を加えた。いうまでもなく、この風説は事実でなかったが、日仏兩國相互の間に、情報を交換したり、外交上の援助を与えたりしたことは、否定できない事実である。当時、日仏同盟の風説に大きな不安を感じた李鴻章は、かつて榎本武揚公使に、もし日本がフランスを援助しないなら、清国側は朝鮮あるいは琉球問題について日本に譲歩する用意があると、言明した。『日本外交文書』一六卷四五七—六七八頁には、日清仏三國に関する資料が少なからず取められている。その中に比較的重要な英文書信二通、(A)明治一六年四月一五日付の榎本公使から上海駐在品川総領事にあてた書信、(B)同年七月二三日付の品川総領事から井上外務卿にあてた書信によれば、日仏兩國間の微妙な関係を窺うことができる。

A) Inouye asks whether the following report is true China preparing about to despatch man of war 派兵諸島 and somebody recommend to stir up the whole people of Japan in the view of war with China. I think there is no such aspect but please report to Inouye of your view.

B) We have received information, from a trustworthy source, that the French Government has authorised the Government of Japan to send a certain number of Japanese officers to Tonquin in order to follow the French expedition in that country. Two of these officers left on the 15th inst. Per French mail steamer. No political significance is to

be attached to this event.

My dear Uyeno,

This doesn't look very like neutrality, does it? Won't the Chinese think Japan is helping France?

FHB

⑤ Direction politique No. 65; Shanghai le 17 Decembre 1884.

⑥ 日仏改正条約の批准交換は甚だ遅延し、一八九八年（明治三二）三月一六日、東京において行われた。欧米主要諸国の改正条約の調印および批准交換の年月日は次の通りである。

国 別	調印の年月日	批准交換の年月日
イギリス	一八九四、七、一六	一八九四、八、二五
アメリカ	一八九四、一、二二	一八九四、三、二一
イタリヤ	一八九四、二、一	一八九五、八、四
ロシア	一八九五、六、八	一八九五、九、一〇
ドイツ	一八九六、四、四	一八九六、一、一八
ノルウェー	一八九六、五、二	一八九七、五、一
ベルギー	一八九六、六、二二	一八九六、一、二八
オランダ	一八九六、九、八	一八九七、八、二〇
フランス	一八九六、八、四	一八九八、三、二六

〔附記〕サンクイッチ公使の書信原文は次の通りである。

Tokio, le 30 Novembre 1884

Son Excellence

Monsieur Jules Ferry

Président du Conseil

Ministre des Affaires Etrangères à Paris

Monsieur le Président du Conseil,

Les partis politiques ne paraissent pas jouer au Japon d'une bien grande vitalité. Le parti des Conservateurs constitutionnels a disparu l'année dernière et personne ne s'est avisé de le regretter. Tout dernièrement, M. Itagaki prononçait dans une réunion solennelle tenue à Osaka, la dissolution du parti libéral progressiste dont il avait été l'ardent organisateur et que durant trois années il avait dirigé non sans quelque bruit, et aucune protestation ne s'est fait entendre. Il ne reste donc aujourd'hui que le parti de la réforme et celui des conservateurs impérialistes.

Les chefs de ces divers partis avaient autrefois mené dans la presse une campagne très-vive qui eut pour résultat l'édit du mois d'Octobre 1881 par lequel le Mikado s'est engagé à doter le Japon, en l'An 1890, d'une Constitution et d'une assemblée nationale. Ils avaient espéré mieux et l'édit impérial ne les satisfaisant point, ils voulurent entreprendre une campagne nouvelle dans le

but de rendre plus rapide l'avènement du régime libéral qu'on leur promettait. Mais le Gouvernement du Mikado ayant fait paraître un décret interdisant sous les peines les plus sévères toute discussion publique concernant la future constitution, les chefs du mouvement ne pouvant plus disposer des journaux réduits au silence publièrent des programmes politiques et groupèrent autour d'eux leurs partisans.

Le *Djyouda* ou parti libéral et progressiste fut le premier à se former sous la direction de M. Itagaki, ancien Ministre et Conseiller privé du Mikado. Les membres de cette association s'engageaient par un serment signé de leur sang à se prêter mutuellement secours et assistance et à défendre la politique libérale progressiste. Les adhérents furent d'autant plus nombreux que le programme du parti, vague et mal défini, était fait pour séduire tous ceux qui pour une raison quelconque avaient lieu d'être mécontents de l'état de choses existant.

A ce même moment, M. Okouma, Ministre des Finances, dont les idées ne s'accordaient point avec celles de ses collègues, donnait sa démission et son exemple était suivi par un certain nombre de fonctionnaires. Ce fut l'origine d'un autre parti libéral, plus modéré dans ses visées que celui de M. Itagaki, et qui prit le nom de Kaishintō ou parti de la réforme. M. Okouma en devint l'inspirateur et le chef.

Les Conservateurs, de leur côté, se divisèrent en deux

groupes : les conservateurs constitutionnels qui, comme je l'ai indiqué plus haut, n'existent déjà plus et les conservateurs impérialistes sur lesquels le Gouvernement actuel pourrait s'appuyer si besoin était.

Les chefs des quatre partis ainsi constitués, déploieront la plus grande activité pour recruter des adhérents. Ils s'agissait, en effet, de travailler de longue main à se créer des influences en vue de la future assemblée nationale. Mais la réunion de cette assemblée devait se faire attendre pendant de longues années ; les Japonais ne sont guère patients et bientôt ce qui devait fatalement arriver ne manqua pas de se produire : les rivalités entre les partis devinrent tellement vives qu'on en oublia presque les affaires d'intérêt général. Ainsi les troubles sérieux qui se sont succédé assez rapidement dans ces derniers temps servirent, pour ainsi dire, de chefs d'accusation contre le parti libéral progressiste qui effectivement comptait dans ses rangs un nombre assez considérable de jeunes gens turbulents, imbus d'idées fausses empruntées aux doctrines des socialistes européens ou américains. M. Itagaki eut peur de compromettre sa propre situation et le 29 Octobre dernier il mettrait fin au parti libéral progressiste qui datait du 29 Octobre 1881 ! Il eut soin, toutefois, de déclarer dans un discours pompeux et diffus que, si les circonstances ne permettraient plus aux libéraux-progressistes d'agir comme parti, chacun d'eux n'en devait pas moins consacrer individuellement toute son

énergie au service des idées dont dépendaient l'avenir et la prospérité de la patrie.

Mais déjà on explique différemment la dissolution du parti progressiste. On prétend que la retraite de M. Itagaki a été tout simplement achetée par le Gouvernement du Mikado. Des accusations de ce genre sont toujours dangereuses, car s'il est difficile de les appuyer de preuves, il est plus difficile encore pour ceux qui en sont l'objet d'en démontrer la fausseté. Il est avéré, toutefois, que lorsque M. Itagaki se rendit en Europe vers la fin de l'année 1882, en compagnie de M. Goto, le Gouvernement du Mikado lui facilita son voyage. Il est également certain qu'à son retour, il se montra beaucoup plus modéré dans ses opinions qu'il ne l'avait été avant son départ.

J'ai eu l'occasion d'entendre discourir M. Itagaki : il m'a produit l'effet d'un orateur de Club plutôt que d'un homme d'état. Son ami M. Goto, m'a paru au contraire, doué d'un certain esprit politique ; il a, à un haut degré, le sens pratique des choses ; mais il a ce grave défaut, pour un homme politique, de se trop mêler de spéculations commerciales. Il n'en est pas moins constant que le Gouvernement du Mikado a toujours usé de beaucoup de ménagements envers ces deux personnages. Peut-être

existe-t-il entre les Ministres actuels et leurs anciens Collègues quelque secret commun remontant à l'époque de la liquidation du Gouvernement du Shioگون.

Quoiqu'il en soit, l'importance des partis politiques au Japon est, pour ainsi dire, à l'état latent. On ne pourra en juger d'une manière sérieuse que lorsque l'Assemblée Nationale aura été réunie. Jusque là le Japon continuera probablement à vivre sous le régime actuel qui n'est autre chose que le Shioگونat transformé en oligarchie./.

Sienkiewicz

Post-Scriptum.-Dans mon rapport du 25 Mars dernier sur la Presse au Japon s'est glissée une erreur que je crois devoir rectifier. C'est M. Okounna et non M. Itagaki qui est le chef du parti de la réforme, c'est-à-dire du parti libéral modéré. La dissolution du parti libéral progressiste ou radical devant contribuer à relever l'importance du rôle que peut jouer à un moment donné, M. Okounna, il y a un certain intérêt à établir nettement son attitude./.

Sienkiewicz

(大阪外国語大学教授)

The Spectator and the Society of the Augustan Age

by

Takamichi Yamaguchi

The object of this article is to make *The Spectator's* position clear in the society of the Augustan Age.

The success of *The Spectator* as a literary periodical depended on the stability of the Revolution Settlement which was the basis of the modern English constitution.

Some papers of *The Spectator*, indeed, seemed in favor of the old patriarchal agricultural society, but others more in number preferred the rational and industrious trading society. While it seemed to lament the decline of the old régime it expected, in fact, the new one's growth more heartily.

The Spectator's social and moral teachings were most fitted for the way of life and the taste of the growing upper middle class, the new governing class, which quarrelled and was reconciled with the landed class, the traditional governing class. *The Spectator* offered a variety of topics with philosophical embellishment to the people of the new class and delighted and cultivated them.

The Spectator is the amiable symbol of the conservative modernization of England, and foreshadows the succeeding stagnation in the intellectual climate.

The Democratic Movement in Japan in the Eyes of a French Diplomat

by

Peng Tse-chou

A few years ago some Franco-Japanese diplomatic documents from Paris came into my hands, among which was a letter of high interest written on November 30, 1884 by Joséph Adam Sienkiewicz, the French Ambassador to Japan. We can see from this letter that Sienkiewicz was very biased in his view of the democratic movement in Japan,

above all in regard to the Japanese Liberal Party. At the time when he dispatched this letter to his government in Paris, the political situation in Japan was becoming critical. In addition, the Sino-French war had broken out and French troops had been attacked by the Chinese in Taiwan. Accordingly, it is quite probable that Sienkiewicz's communication influenced subsequent Franco-Japanese relations along the following lines: (a) it induced the Jules Ferry cabinet to refuse any assistance to the Liberal Party in Japan; (b) it dissuaded the Paris government from making an anti-Chinese pact with Japan; and (c) it led France to refuse Japanese proposals for a new treaty.

Some Remarks on the Spartan Dyarchy

by

Yūichiro Shinmura

Sparta was a dyarchy not a monarchy. In ancient times dual or even multiple kingship or chieftainship was not uncommon, and it is a mistake to regard the dyarchy of Sparta as unique.

The Dorian invasion into the Peloponnese took place some time in the twelfth century B. C. In early Sparta there were three Dorian tribes, the Hylleis (Heraklids), Pamphyloi and Dymanes, presumably with their own phylarchs, and the so-called Theban Aigeidai. For a long time leadership was competed among the three or more phylarchs. In the early eighth century B. C. Agiad Teleklos held undisputed leadership, but after his death three chieftains of the Agiads, Eurypontids and Aigeidai reigned together with equal powers. The last dropped out about 700 B. C. for some unknown reason. Since then the Agiads and Eurypontids assumed the title of royal houses. And later they both claimed descents from twin brothers, Eurysthenes and Prokles, the sons of Heraklid Aristodemos.